

# 【要旨】サキヤ派中観思想史研究序説<sup>\*</sup>

## —師資相承の系譜の分析を中心として—

西 沢 史 仁

チベットでは、後代ゲルク派とサキヤ派の間で中観の見解を巡って激しい論争が繰り返されたことは夙に知られた事実である。両派の空性理解の相異は、十五世紀のサキヤ派の大学匠コラムパ (Go rams pa bSod nams seng ge, 1429-1489) の『見解弁別』 (*lTa ba'i zhan 'byed*) 等によれば、端的には、サキヤ派では、一般に空性は知や言葉によって捉えられず、存在するとも存在しないとも表現されないものと解釈されたのに対して、ツォンカバを始めとするゲルク派では、空性は知によって理解され、知の対象として存在すると明確に説かれた点にある。

ところで、このコラムパの見解は後代のサキヤ派の典型的な空性解釈とされるが、サキヤ派の学統において、サキヤ五祖 (Sa skya gong ma rnam lnga) のようなサキヤ派教学を創立した初期サキヤ派の学者を始めとする歴代のサキヤ派の諸学者により空性が如何に理解され後代に伝承されてきたのかということはこれまで殆ど研究がなく、依然として未知の状態に留まっている。サキヤ派中観思想史の概要は未だ得られていないのである。本稿はそのような状態に鑑み、サキヤ派における中観思想の学統を抽出・整理し、その全体像を俯瞰することを通じて、サキヤ派中観思想史研究の見取り図を作成することを目的とする。この作業により、研究対象として取り上げるべき学者や著作について目処を立て、研究の大凡の枠組みを措定することが可能となるのであり、その次の段階において、具体的なテキスト研究に進むことを予定している。その意味で、本稿は来るべきサキヤ派中観思想研究史のための序説ないしその予備的研究と位置付けられる。

<sup>\*</sup> 編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp/>) の以下の URL に掲載。 <http://id.nii.ac.jp/1374/00008910/>

研究の手順としては、まず第一に、サキヤ派の聴聞録を資料として取り上げ、サキヤ派に伝承された中観典籍の師資相承の系譜（以下、相承系譜と略称）を概観する。《聴聞録 (gsan yig)》とは、《受法録 (thob yig)》とも称するが、自分が聴聞した各仏典の相承系譜を記した文書である。本稿で依用するのは十八世紀に作成された『シュチェン聴聞録』であり、同書に記載されているサキヤ派における中観典籍の相承系譜を確認することで、サキヤ派の中観の学統に関する大凡の見取り図を得ることが出来る。

次に、12-13世紀に初期サキヤ派教学の形成に寄与したソナムツェモ (bSod nams rtse mo, 1142-1182) とサパン (Sa paṅ, 1182-1251)、十四世紀におけるサキヤ派教学中興の祖ラマタムパ・ソナムギェルツェン (Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan, 1312-1375)、十四世紀において特に中観の学統の復興に対して多大な貢献を果たしたレンダワ・シヨンヌロトウ (Red mda' ba gZhon nu blo gros, 1349-1412) らの伝記及び関連文献を資料として、彼らの中観の学統を検討する。彼らの伝記資料は聴聞録には現れない情報を提供しており、サキヤ派の中観の学統を考える上で無視できない情報源となっているからである。併せて伝記資料やその他の関連文献から得られた情報に基づき聴聞録に見出される相承系譜の妥当性を検証することも研究の視野に入れている。聴聞録の資料としての信憑性は決して自明ではなく、それ自体批判的な検討対象であるからである。

本稿は以下の章立てから構成されている。

## 序

### 1. 聴聞録に見出されるサキヤ派の中観説の学統

- (1) 『根本中論』の相承系譜
- (2) 『入中論』の相承系譜
- (3) 『四百論』の相承系譜
- (4) 『入菩薩行論』の相承系譜

### 2. 伝記資料に見出されるサキヤ派の中観説の学統

- (1) ソナムツェモの伝記資料
- (2) サパンの伝記資料
- (3) ラマタムパの伝記資料
- (4) レンダワの伝記資料及びその他の関連文献

結語—サキヤ派における中観研究の所依典籍とその歴史の変遷—  
文献表

本稿で行なった相承系譜の批判的研究の結果として明らかとなったことは各章末毎に「小結」の形で纏めたので、委細はそれに譲り、ここでは「結語」の部分のみを引いておく。即ち、後代の聴聞録に収録された中観三論書（『根本中論』、『入中論』、『四百論』の三つ）の相承系譜においてサキヤ派の学者が登場するのは、十四世紀のヤクトック・ロントウン師弟が最初であり、それ以前の初期サキヤ派の学者は系譜には全く見出されなかった。このことは、十四世紀に至るまでサキヤ派においては、『根本中論』等の中観論書を本格的に修学する伝統がなかったことを示唆しており、それがほぼ事実であったことは、レンダワが十四世紀に当時衰微の極みにあった中観の学統を復興する以前には、サキヤ派において中観論書に対する註釈が殆ど皆無であったことが如実に示している。伝記資料によれば、レンダワに先立ち、ラマタムパが『六十頌如理論』等の中観六理聚の小品に対して註釈を著したと伝えられているが、その現存は確認されておらず、また『根本中論』等の中観三論書には註釈は著されなかった。それに対して、サキヤ派教学史上、さらには、恐らくはチベット仏教史上、初めて中観三論書に註釈を著した人物はレンダワであり、彼を端緒として、以後サキヤ派において中観三論書を所依典籍とする中観の本格的な研究が開始された。その意味でレンダワをサキヤ派教学史における《中観学の祖》と称しても過言ではない。そのことは『レンダワ伝』に引かれたカルマパ・クンチョックションヌ (Karma pa dKon mchog gzhon nu) の言葉からも窺い知ることができるが、恐らくは後代のサキヤ派の宗学上の理由により、レンダワの名前はサキヤ派の聴聞録からは抹消された。

他方、サキヤ派においてそれ以前に中観説が全く修学されることがなかったのかというならば、それもまた事実と反することであり、実際、そのことはソナムツェモの『入菩薩行論』の註釈やタクパギエルツェン (rJe btsun Grags pa rgyal mtshan, 1147-1216) の『タントラ現観』 (*rGyud kyi mngon rtogs*)、サバンの『牟尼密意解明』 (*Thub pa dgongs gsal*) 等の初期サキヤ派の学者達の著作に中観説が解説されていることから確認される。問題は、その際に彼らが一体如何なる中観論書を所依としていたのかということであるが、ここに我々はサキ

キヤ派において中観思想研究の所依典籍には歴史の変遷があったことを見出すことができるのである。

端的には、ソナムツェモ等の十二世紀の初期サキヤ派の学者達が中観を研究する際に主に依用したテキストは、龍樹の中観六理聚やアーリヤデーヴァの『四百論』、さらには、「中観自立東方三論」と称される自立派の三大論書（『二諦分別論』、『中観莊嚴論』、中観光明論）やチャンドラキールティの『入中論』等の一連の中観論書ではなく、シャーントイデーヴァの『入菩薩行論』であった。このことは、ソナムツェモやタクバギエルツェン、サパンの直弟子にしてサパン伝を記したロパクンケン（lHo pa kun mkhyen Rin chen dpal）等の初期サキヤ派学者を初め、さらには、十四世紀に活躍したラマタムパ（1312-1375）やササン・マティパンチェン（Sa bzang Ma ti pañ chen, 1294-1376）、サキヤ派に密接に関係があるプトゥン（Bu ston Rin chen grub, 1290-1364）やギェルセ・トンメサンポ（rGyal sras Thogs med bzang po, 1295-1369）のような大学者達により『入菩薩行論』に対して多数の註釈書が著されたことが如実に示している。即ち、『入菩薩行論』に対しては、サキヤ派教学の初期の段階、年代的には、十二世紀頃から十四世紀頃に掛けて綿々と修学の伝統が積み重ねられてきたのであり、このことは、サキヤ派においてレンダワ以前には中観論書に対する註釈書が皆無に近い状態であったのと著しく対照的である。

『入菩薩行論』は菩薩行論を主題とするテキストであるので、中観思想を正面から取り上げたものではないが、その第九章冒頭部に見られる二諦説の議論が初期サキヤ派の中観思想の議論の基盤とされた。その意味で、サキヤ派中観思想の学統においてこの『入菩薩行論』が果たした役割は極めて大きなものであったと評価する必要がある。レンダワ以前には、中観三論書などを真っ向から取り上げて研究する伝統はなかったが、中観を研究する伝統が皆無であったわけではなく、それは主に『入菩薩行論』を、その中でも特にその第九章を所依典籍として行なわれてきたのである。サキヤ派において『入菩薩行論』が重要視されたのは、サキヤ派が基本的に密教や行の修習を重要する学派であったことと無縁ではない。サキヤ五祖の著作の大部分は密教関係の作品であり、サキヤ派において顕教が本格的に取り上げられるようになったのは、第四祖のサパンに至ってからである。『入菩薩行論』は決して密教の典籍ではないが、そこに詳説された菩薩行の議論は行重視のサキヤ派の学統に合致するところがあっ

たと推定される。この『入菩薩行論』は、所謂、《カダム六典籍 (bKa' gdams gzhung drug)》の一つでもあり、サキヤ派のみならず、カダム派においても熱心に研究された。しかるに、十四世紀に至り、レンダワが中観三論書を所依典籍として中観の学統を新たに打ち立てたことを契機として、以後、サキヤ派において『入菩薩行論』の研究が後退し、代わりに中観三論書の研究が前面に出るようになったのである。

このように、十四世紀を境としてサキヤ派の中観思想研究において所依典籍の歴史的転換があったことが確認されたわけだが、この転換を仮に《サキヤ派中観思想史におけるパラダイム転換》と称しておきたい。所依典籍が『入菩薩行論』から中観三論書へ移行することに応じて、それに基づく中観思想研究の在り方もその根底から一新されたからである。そのパラダイム転換を惹起した人物こそが十四世紀のサキヤ派の大学匠レンダワであった。そして、この転換は、単にサキヤ派に留まることなく、特にレンダワの学統を受け継いだツォンカパが、中観説を、その中でも特にチャンドラキールティの帰謬派説を諸々の学説のうち至上の見解として位置付けたゲルク教学を創立し広く宣説したことから、以後のチベット仏教界の思潮を定めることになった。それは、サキヤ派の枠組みを超えた《チベット仏教思想史におけるパラダイム転換》にまで展開したと評しても過言ではない。

ゲルク派では、「五大典籍 (gzhung chen po ti lnga)」と称される五つの学課（論理学・般若学・中観学・戒律学・俱舍学）を主要な修学対象とするが、このうち特に中観説を至上の見解とする解釈は、レンダワ・ツォンカパ師弟による中観復興運動を契機として初めて打ち立てられたのである。それ以前には、中観説は決して主要な修学対象ではなかった。そのことは、『レンダワ伝』に明記されているように、当時、中観帰謬派の学統を伝えるタンサク寺において、中観は「死体 (shi ro)」と表現される程に衰微していたことに如実に示されている。ツォンカパによる中観説を頂点に据えた仏教教学体系の形成とその歴史的展開の委細については、稿を改めて検討することにしたい。

\*本稿は、JSPS 科研費「若手研究」(JP19K12951) の助成に基づく。

